

写真展 神々の座 出雲

並河萬里の写真展“神々の座出雲”が古代出雲歴史博物館で開幕しました。7月5日までの特別展です。萬里さんは、父を大社町、母を松江市の出身者に持ち、両親の洋行帰りのインド洋上の船上で生を受けたと聞いています。東京に育ちながら出自を出雲に持つことで、ライフワークと最後の作品を出雲に求めました。

平成2年からの8年間、鷺浦、松江などに居をかまえ撮影を続けました。私は、平成2年、文化課補佐として現在の美術館、歴史博物館につながる建設検討委員に萬里さんをお願いしに東京の自宅に出向いたのが最初の出会いで、爾来、私設秘書兼押しかけ飲み友達の役廻りをしながら撮影の表・裏につきあいをしてきました。萬里さんの“ふるさと教育”の家庭教師・情報提供係でもありました。

若い時から、シルクロードや中近東などの外国を旅する冒険野郎で、主たる作品もそれに関するものが多くありながら、一方では国内の文化財、特に神仏にまつわるものが数多くあります。

民族性の違いや文化の多様性、歴史の話などを飲みながらよく聞きました。若い時には無茶な飲み方をしたに相違ないけれども、もうあまり量はやらず、私の飲み方を「藤原さんは飲んだ時と素面(しらふ)の時のギャップがすごいからなあ」と子どもに接する包容力で喜んでいました。そうした時には私もつつい本音で「出雲型地域社会のしがらみとそれへの対応の仕方」について講釈したものです。

撮影については、「出雲は難しいなあ」とともに、「出雲は何がひそんでいるかわからないからなあ」という述懐をよく聞きました。写真でもって出雲の心象風景を撮ることに精魂をかたむけ

て、撮影はしばしば深夜になったり、時には思いどおりのものが撮れず、しばしば日を替えた再チャレンジがありました。心象風景を代表する1枚が、シャギリ舞の合成写真です。神も仏も、神迎えも、仏事の儀式も、萬里さんの心と対象物とがつながった瞬時を捉えました。仏は、柔和であったり荘厳であったり陰影を写しました。民の生活・民俗行事の中にも神と仏と人の生き様との奥底でのつながりを捉えました。

民俗行事、民の生活の撮影のためには、そこに住む人々の心情と同化することを第一としました。そのためには、まず地域へ「通う、入り込む、話を聞く」ことを徹底しました。広瀬の花田植えに案内して山越えをする時に、あまりにも未改良な山道で恐縮していると、「いい所だ」を連発していました。熊や猪が棲む所に神も棲まうとでもいわんが如くでした。

私の実家の茅屋根の葺き替えの写真が組み写真の一カットにあります。境界の生活空間に神の棲まう奥の座を体感したが如くに、「いい所だ。いい写真が撮れた。ここが藤原さんの感性を育くんだんだ」と感想を話してくれました。

石見・隠岐も「出雲」として撮影しました。「神々の座」には「出雲」の境がないからです。

最後に「食育」についてです。日本の伝統と地域の食文化にかかる「食べる知恵」は花マルでした。活きのいい魚が大好きでした。赤貝、ワレット豆、ノビル、ツクシなども……………。

煙草は？ヘビーでした。

展覧会場へ是非、足をお運びください。

出雲に鎮まる大神たち



あいつは腰が抜けちゃったんじゃないか。シルクロードをはじめアジアの仏跡、マヤ文明や地中海文明の遺跡、ヒマラヤや中東など、これまでは世界各国の、それも他の人が行かないような辺境の地ばかりを、命からがら渡り歩いてきたというのに、今度はなぜ出雲なのだ？——私を知る人々は、みな首を傾げる。私だって、還暦を目前にして東京の自宅を引き払い、一族郎党引き連れてこの地に移り住むほどまでに、出雲にのめりこもうとは、夢にも思っていないから。もつとも、出雲に縁がなかったわけではない。松江は母の故郷で、父も大社町の出。私自身も旧制松江中学に学んだこともあるから、体に流れる出雲人の血に呼び戻されたといえるかもしれないが……。ともあれ四十年間、夢中で世界の遺跡を撮り続け、あらゆる国のさまざまな神々と出会い、語りあつてきた。だが、歳をとるにつれ、気になつてきたことがある。私の視線は外にはかり向いていたのではなかったか？ 日本の神様のことをもつと知りたい……。そう思ったことがきっかけで、この十年ほど、海外取材から帰国するたびに、伊勢、高千穂、出羽三山と、神宿る地を求めて、日本中をさまよっていた。そうして最後にたどり着いたのがここ、出雲だったというわけだ。

出雲——この地は高天原を追われたスサノオが降臨して以来、ヤマトノオロチ退治に始まる壮大な記紀神話の舞台となった神々の聖地。旧暦の十月、世の中が神無月となり、出雲だけが神在月となるのは、日本全国八百万の神々がこの出雲に集結し、一年分の神事を合議するためだという。出雲こそ、神様世界の首都、「神々の座」なのである。